

1. 「朝貢貿易」を巡る琉球への評価

- ・琉球＝明朝の朝貢国となった 14 世紀末から急速に海上交易勢力として発展
『歴代宝案』：琉球王国の漢文外交文書を収録、1933 年に公開、利用可能に
→中国をはじめ朝鮮・東南アジア諸国への使船派遣の詳細が知られるように
- ・高良倉吉氏による「琉球の時代」への評価＝通説的理解として定着
琉球の海上交易発展を支えた要因
明朝の朝貢政策と海禁政策による中国商人の活動制約、地域間交通の不均衡
交易船の下賜、航海や通訳、外交文書作成などを担当する「久米村」の形成
琉球の「国家統一」によって「国営貿易」としての交易活動を展開し得た
琉球の海上交易衰退を導いた要因
アジアに進出したポルトガル人等の暴力的な商業活動
海禁の形骸化に伴う中国商人の活動の活発化
日本商人の東南アジア進出による、琉球の中継貿易の利点喪失
→以上の要件の大部分は他の朝貢国についても同様に認められるもの
何故「特に」琉球が有力な交易勢力として台頭し得たのか？＝琉球の持つ独自性？
- ・琉球の「朝貢貿易」に対する評価＝研究史におけるバイアスの問題
「沖縄人は日本民族の一分枝」論：特に 1972 年の沖縄「復帰」までの状況を反映
「沖縄と本土との真の統一」という問題意識
→琉球の独自性より「日本本土」との一体性を強調する傾向
中国との「冊封」「朝貢」関係も“仮の姿”として認識される
中国との朝貢貿易よりむしろ対東南アジア貿易に対する関心：
初期『宝案』研究の時期(1940 年前後)と「南進」との相関？
日本の視点に偏りがちな「朝貢」研究の未成熟
秋山謙蔵氏の明代「朝貢表」：現在でも琉球の優位性を語るために用いられる
←『明史』に基づく不正確なもの、朝鮮の異様な順位の低さ
「朝貢貿易」の概念そのものに対する混乱？

2. 明朝の対琉球優遇政策と琉球

- 琉球の海上貿易活動＝中国との「朝貢貿易」を基軸にした“中継貿易”
←明朝の対琉球優遇政策による“優位性”の保障

(1) 琉球の対中国朝貢に関するいくつかの統計

※ 生田滋氏の「貢期」に着目した時期区分：図式的に過ぎる

図1 10年単位の琉球朝貢の動向

表1 // 琉球朝貢船乗組員数の推移 …朝貢船の規模

表2 // 琉球朝貢品数 目 …馬・硫黄

表3 // 琉球附搭貨物数 目 …蘇木・胡椒・番錫

→琉球の対中国朝貢の最盛期は1383(洪武16)以降、1450年代までに求められる

(2) 明朝の対琉球優遇政策の概要

対琉球優遇政策の開始：対日本交渉が膠着する1380年(洪武13)前後に淵源？

「対倭寇(→海寇)政策」としての琉球の取り込み

※「琉球の馬」にその根拠を求める説明＝あまりに表層的？

「朝貢不時」：「貢期」制限からの自由、他の朝貢国は一般的に「三年一貢」
海船の下賜：『宝案』にも事例散見、洪武・永楽期で「三十号船」を数える？

「貢道」選択の自由？：泉州→福州とは別に、寧波・瑞安(東安館驛)も

「三十六姓下賜」？：後世に「脚色」、一方で公的な派遣を窺わせる史料の存在
琉球「官生」の受け入れ：南京国子監、1392(洪武25)～1426(宣徳元)に“常駐”

「帰省」→「復監」を繰り返す琉球官生

朝貢業務にも関与？←使節も兼ねる？「三五郎壘」の例

(3) 明朝の対琉球政策の転換と琉球の変容

正統年間以降：一律に各朝貢国からの朝貢に対する制限への動き表面化

朝貢制限に見られる対日本と対琉球の「時差」と「温度差」

従順な朝貢国としての認識と海寇と連携しかねない危険な勢力としての認識

＝琉球に対する優遇政策の「根拠」？

それでも1460年代以降になると琉球に対する朝貢制限が表面化

→この環境変化に対応するように、琉球国内における王国支配体制の整備・中央集権化への動きが見られるように

第一尚氏王統→1470年に第二尚氏王統へ、権力基盤の安定化

官制の整備：按司(＝寨官?)の集住、庫理・ヒキ制度、「辞令書」

度重なる軍事活動と領域の拡大：より強固な統合へ

3. 琉球王国の「朝貢」と「貿易」を巡る状況

(1) 「朝貢」を巡る状況

※「朝貢」—「冊封」／「朝貢」—「貿易」

「朝貢」の名目：歳時朝貢、謝恩、慶賀（正旦節・万寿聖節・登極・皇太子冊立など）、請封（告訃）、進香、送回人口（漂流民・被虜民の送還）など

「朝貢」使節の構成：赴京使節・存留スタッフの存在／「官生」の関与？

「朝貢」品の用途：馬→福建省の驛馬に／硫黄→南京の倉庫へ

「朝貢」国としての立場：従順・「卑小」／潜在的脅威、交易トラブル

(2) 「貿易」を巡る状況

「附搭貨物」の規定と「牙行」：五割の「抽分」（現物関税）と「折耗」分（手数料）

「牙行」の激減（24名→5名）：牙行を経由しない交易？

「貢道」の選択？と陶磁貿易(亀井 1997)：龍泉窯青磁→景德鎮窯染付／福建窯

「勘合」による照合手続き：琉球では独自の「半印勘合」を使用(岡本 2001)

対朝鮮・対東南アジア貿易の変遷：対朝鮮は 15 世紀中期以降日本商人が主流に

対東南アジアは現地の状況により寄港先移動

4. 今後の展望、というより課題

(1) 明代「朝貢事列表」作成への試み

琉球・日本や特定の国々だけでなく、明朝に朝貢した全ての国・勢力についての、明代を通じた朝貢事例の一覧が必要 ←真の意味での朝貢国・琉球の評価

『明実録』に基づいた「朝貢事列表」作成への試み

(2) 薩摩侵入、明清交替と琉球のスタンス

「冊封」のあり方を巡る「頒封」と「領封」のせめぎ合い(金城 1996)

夏子陽の「日本人」に対する 2 つの記述(夫馬 1999)

【参考文献】

- 赤嶺誠紀 1988 『大航海時代の琉球』 沖縄タイムス社
- 赤嶺 守 2004 『琉球王国—東アジアのコーナーストーン—』 講談社（選書メチエ）
- 秋山謙蔵 1939 『日支交渉史研究』 岩波書店
- 安里延 1967 『沖縄海洋発展史—日本南方発展史序説—』 琉球文教図書（1942 初刊 三省堂）
- 岡本弘道 1996 「明代初期における琉球の官生派遣について—『南雍志』にみる国子監留学生の位置付けとして—」（『歴代宝案研究』6・7 合併号）
- 岡本弘道 1999 「明朝における朝貢国琉球の位置付けとその変化—14・15 世紀を中心に—」（『東洋史研究』57-4）
- 岡本弘道 2001 「琉球王国の半印勘合と明朝の朝貢勘合との関係について」（『第八回琉中歴史関係国際学術会議論文集』）
- 亀井明德 1997 「琉球陶磁貿易の構造的な理解」（『専修人文論集』60）
- 金城正篤 1996 「頒封論・領封論—冊封をめぐる議論—」（『第三回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』）
- 小葉田淳 1963 「歴代宝案について」（『史林』46-4→1990 年『歴代宝案研究』創刊号に再録）
- 小葉田淳 1993 『増補 中世南島通交貿易史の研究』 臨川書店（1939 初刊 日本評論社）
- 曹永和著、外間みどり訳 1992 「明洪武期の中琉関係」（『浦添市立図書館紀要』4）
- 孫薇 1991 「冊封・朝貢について—中琉の冊封・朝貢関係を中心に—」（『沖縄文化研究（法政大学沖縄文化研究所紀要）』17）
- 高良倉吉 1989 『新版 琉球の時代—大いなる歴史像を求めて—』 ひるぎ社
- 高良倉吉 1998 『アジアのなかの琉球王国』 吉川弘文館
- 高良倉吉 1987 『琉球王国の構造』 吉川弘文館
- 豊見山和行編 2003 『琉球・沖縄史の世界』（日本の時代史 18） 吉川弘文館
- 平田守 1986 「琉明関係における琉球の馬」（『南島史学』28）
- 夫馬 進 1999 「夏子陽撰『使琉球録』解題」（夫馬進編『増訂使琉球録解題及び研究』榕樹書林）
- 真栄平房昭 1981 「一五・一六世紀における琉球=東南アジア貿易の歴史的位置」（『琉大史学』12）
- 真栄平房昭 1983 「琉球=東南アジア貿易の展開と華僑社会」（『九州史学』76）